

操作主義と一般意味論

会計利益とは何か

孔 炳 龍

序

言葉では、すべてを語ることはできない。しかしながら、言葉で語るとき、そこに共通理解が必要になってくる。操作的定義とは、かような試みの1つなのである。会計学には、経済的利益という言葉がしばしば登場してくる。しかしながら、経済的利益を実際に数字などで表現することはできない。経済的利益のサロゲイトとしての会計利益を操作的に明らかにすることで、間接的に明らかにしていくことで現在では対応するしかない。資産を定義するさいに、会計学でベネフィット（または便益）やサービスポテンシャルなどを用いる。とても抽象度の高い概念である。会計利益もともすれば、かような抽象的な概念で説明することが可能になるかもしれないが、あまり、実践的ではないであろう。本稿は、Bedford 教授の著書を手掛かりに、会計利益を操作的に定義することの必要性を明らかにしている。

1. Bedford 教授の会計利益

「・・・（前略）他の学問領域が採用してきた新しい接近法のなかで、操作的アプローチが最も成功しているといえば、疑いが無い。それは、物理学や心理学といった学問においてとくに有用であることがすでに明らかにされており、また、会計学に多大な将来性を提供しているように思われる¹⁾」。

一般意味論では、人々は、内在的世界と外在的世界で生活しており、内在的考え方や外在的考え方をおこなっている。ここでとりわけ、重要なのは内在的考え方である。人々は、外在的世界で認知したものを、ともすれば、内在的考え方で歪めてしまうことがある。有価証券報告書で企業の会計利益（当期純利益や包括利益など）を知ること、様々な考え

をもつものである。

「ものごとの本質についての人の考え方が、その本質についての新しい知識の発見のために、あるいは人の性質の変化のために、時の経過に伴って変わるし、そしてこの変わりやすさが、ほとんどどんなものについても永久的で不変な概念を排除しているので、操作主義は成功するのである²⁾」。

近年、企業会計では、それまでのボトムラインにあった当期純利益のさらに先に、その他の包括利益を計上し、包括利益という利益概念が誕生した。時の経過に伴って、会計利益のボトムラインの利益概念が変化しているのである^{3) 4)}。

「利益決定の研究における操作的アプローチは、人びとが必要とするものおよび要求するものが変化するにつれて、また、人びとが自分の要求するものおよび必要とするものをより正確に理解するようにするにつれて利益の本質は、時により、場所により、状況によって変化するという命題から出発するであろう。ある状況において利益とされるものは、他の時点や他の環境において、利益とされないかもしれないのである⁵⁾」。

日本では、会計ビッグバーンで、売買目的有価証券が期末時に時価で評価される以前は、取得原価で評価されており、取得原価または時価の低価基準が採用されていた。かような時代の会計利益である当期純利益に、売買目的有価証券の評価益は含まれておらず、現在の企業会計のように売買目的有価証券を時価基準で評価し評価益を会計利益に含めているものと異なるのである⁶⁾。しかしながら、当時の日本の会計学上では、実現主義という概念のもとに、一貫して取得原価主義会計のもとで会計がおこなわれてきたと考えられていた⁷⁾。

「このように、たとえ、一組の測定手続が、時や空

間や文化を超えて一貫して適用されようとも、利益の本質は、予測できないような形で常に変化していると考えられるであろう。このことは、もし変わるものと変わらないものがあるとすれば、測定手続は変わらない要素であり、また利益を構成する内容は変わる要素である、ということを示している⁸⁾。

その後も、日本の会計基準は、会計ビッグバーンと、国際的な会計基準とのコンバージェンスといった形で、減損会計を導入し、リース会計基準などを設定し改訂してきた。かように、利益を測定する収益・費用といった測定手続は変らないが、会計利益を構成する内容は変化してきているのである⁹⁾。

「特定の概念に対応する一組の操作は唯一独特のものであることをわれわれは要求しなければならない。そうでなければ、実際の適用にさいしてあいまいになる可能性があるからである・・・(中略)・・・概念はその属性によってではなく、実際の操作によって適切に定義される¹⁰⁾」。

会計学上では1つの会計事象について複数の会計処理方法がある場合、1つの会計処理方法を採用した場合に継続的に用いることを義務づけている。いわゆる継続性の原則である¹¹⁾。かような継続性の原則が適用される例としては、棚卸資産の原価配分で、個別法、先入先出法、移動平均法、そして総平均法の中から選択することがあげられる¹²⁾。どの会計処理方法を採用したかにより会計利益の数字が異なってくる。

「操作主義は、概念の適切な定義は人がいうことやまたは人がそうであるはずと考えることの中に言い出すことができないと主張することによって概念の意味を明瞭にしようとする試みである¹³⁾」。

当期純利益は、実現利益¹⁴⁾といわれる場合があるが、拙稿で明らかにしたように¹⁵⁾、実現利益といっても人により思い浮かべている内容が異なることはよくあるのである。一般意味論では、かような考え方を内在的思考方という¹⁶⁾。外在的世界で知覚したものについて、思い浮かべる内在的思考方はともすれば千差万別になる。そこで操作的定義による共通理解が必要なのである。

また、「むしろ、概念の意味は、それが有用であ

るとされる領域を特定化することを含めて、その測定によっておこなわれる操作の中に存在するのである¹⁷⁾」。

伝統的取得原価主義会計と会計研究者はよく述べるが、何を意味するかは操作的定義がなされないと不明確になってしまう。拙稿では、かような伝統的取得原価主義会計について、日本の場合で、操作的に明らかにしている¹⁸⁾。

「・・・(前略)・・・操作主義は今や多様に定義されている。しかしながら、それらすべての基礎となっているのは、ある概念に含まれる操作が完全に理解されたときにのみその概念は正確な意味をもちうるという一般的な考え方である¹⁹⁾」。

操作主義自体が様々に定義されているのであるが、本稿では、後述する藤澤教授が述べている操作的定義を操作主義としている²⁰⁾。

2. 外在的世界と内在的世界

①内在的思考方と外在的思考方

藤澤教授は、内在的世界と外在的世界を区別し、内在的世界での内在的思考方の特徴を5つ次のように取りあげている²¹⁾。

- (a) 文脈の意識の欠如
- (b) 自動的反応の傾向
- (c) 抽象のレベルや内外在の混同
- (d) 個別性の無視
- (e) 同義語による解釈で満足

先ず、(a) 文脈の意識の欠如であるが、これは、状況を考えずに、頭の中に浮かんだ概念を正しいかどうかの吟味もせずにつなぎ合わせて、結論を出すことを意味する。(b) 自動的反応の傾向は、事実接すると自動的に推論をおこない、一般化して、結論を断定することを意味する。(c) 抽象のレベルや内外在の混同は、人は、ものの見方の癖があり、原因でないものを原因と見たりしがちである。その場に存在したり、同時に起こったり、相関関係があると、因果関係まであるような気になることが多い。かように、抽象のレベルや内外在の混同は生じやすいのである。(d) 個別性の無視は、学生といった場合、千差万別の学生を「学生」とひとくくりにし

てしまい、学生 1 と学生 2 といったように区別しないことを意味する。そして (e) 同義語による解釈で満足は、内在的考え方をしている人は、自分が考えている時に使っている言葉が他の人により他の意味を持つ可能性があるということなど考えが及ばず、たとえば「朝食」といった場合、自分が食べている朝食のことを思い浮かべていて、他の人が異なる内容を思い浮かべることができることを考えずに満足することを意味する。

かような内在的考え方には、次のような問題が生じる。

- (a) 結論や主張が正しい保証がない。
- (b) 偏見に固執しやすく、しばしば他人を傷つける²²。

次に、藤澤教授は、内在的考え方に対して外在的考え方を次のように述べている²³。「たとえば、『朝食を食べると、学力が上がる』という主張にめぐりあったら、どう対応すれば良いであろうか。『こんな主張は内在的考え方によるから、初めから無視しよう。』という対応は、内在的対応でしかないので、何パーセントが含まれている真実を見逃してしまうことになりかねない。言語的レベルだけで考えずに、実在のレベルを意識するとすれば、まずはそこでいう朝食がどう定義されているのかが問題になるだろう。栄養がどんなに偏っていても、起床直後に食べさえすれば朝食と言えるのか。学力に良い影響を及ぼすために朝食が備えるべき条件としては何があるのか。次に、そこでいう学力はどう定義されているのか。知識量なのか、興味関心の深さなのか。演算処理能力なのか何なのか。こういったことを明確にしないと、『朝食を食べると、学力が上がる』という説が成り立つかどうかはわからない。また、何を根拠にそう主張するのかということも確認しておく必要があるだろう。このように、一つ一つ外在的事実を確認しながら命題の正しさを吟味していく習慣を『外在的考え方 (extensional orientation)』と言う²⁴」。

②内在的意味と偏見

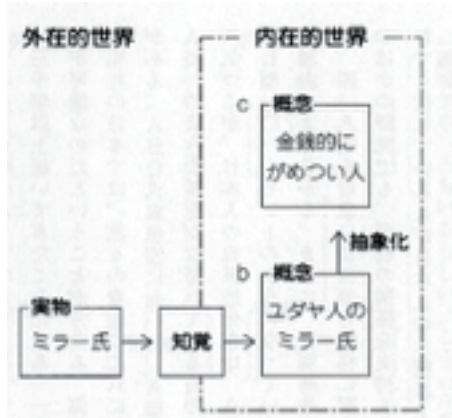
分類はしばしば早まった断定を導く。「たまたま中国人にアパートの一室を貸したら、夜中に大声でパーティーを楽しみ、近所から苦情が来るようなこ

とが複数回あったというような経験をする」と、『もう二度と中国人には部屋を貸さない』という家主も出てきたりする²⁵。これは、分類に無関係な特性を、誤った一般化によって付与している例といえよう。偏見や差別も実はかような思いこみによることが多い。

かような事態を回避するために、Korzybski 教授が提唱しているのは、「見出し番号」をつける方法である。中国人も、中国人 1、中国人 2、中国人 3、そして中国人 4・・・というようにすることによって、それぞれ異なることを明らかにするのである。

それでは、抽象レベルの混同による偏見についてみてみることにしよう。図 1 は、ユダヤ人のミラー氏に対する偏見を簡潔に表わしている。ミラー氏はユダヤ人である。そのミラー氏について、「金銭的にがめつい人」とみなす抽象レベルの混同がこの図によって示されている。この図は、偏見や差別の形成過程を説明している。

図 1 偏見と差別



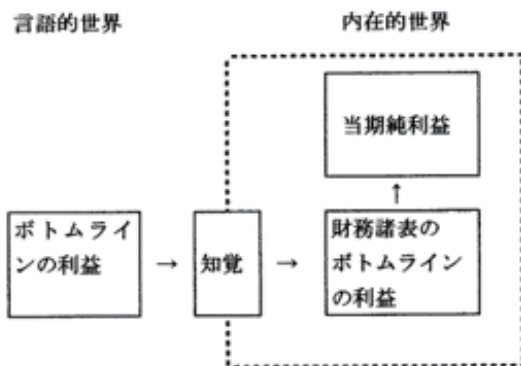
出所：藤澤 (2011, p.137)

偏見とまではいかないが、会計学上では、時価会計について様々な考え方があり、取得原価主義会計の延長上にある時価会計や公正価値会計としての時価会計のようなものを想定できる。たとえば、これらの時価会計は、時の経過と共に、一般意味論で前提としている「地図は現地ではない」から推定できるように、変化してきているのである。

図 2 は、日本の会計と会計研究者の内在的世界の

1つの例を表わしている。ボトムラインの会計利益といった言葉から、会計研究者は、包括利益でなく当期純利益を想定することがあるかもしれない。しかしながら、そのような考えは、皆共通であるとは限らない。したがって、会計利益を操作的定義により明らかにすることにより、共通の会計利益を想定し考察していくことが必要なのである。

図2 抽象のレベルの混同（会計利益）



出所：筆者が藤沢教授の図をもとに会計学に適用し作成したもの

3. 会計利益と抽象のハシゴ

それでは、われわれはどうやって会計利益を知覚するかであるが、一般意味論の抽象のハシゴから明らかにしてみよう。

Hayakawa 教授は次のように述べている。「宇宙は不断の流動状態である。星は、成長し、冷え、爆発しつつある。地球も変化しないものではない。山々はすり減り、川は水路を変え、谷は深まりつつある。すべての生命は、変化の過程であり、生まれ、育ち、衰え、死ぬ。われわれがかつて『活性のない物質』と呼びならわしたもの—椅子や卓子や石など—も不活性ではない。それは、今では周知のように、微視的なレベルでは電子の渦巻だからである。たとえテーブルが昨日と、また百年前と今日とでまったく同様に見えようと、それは変化しないのではなく、変化がわれわれの肉眼に認められないほど僅かである、というだけのことである。現代の科学にとっては、『固定した物質』という物は無い。たとえ物質

がわれわれには『固定』しているように見えても、それはただその動きが速すぎるか微少であるかで感ぜられないだけのことである²⁶」。

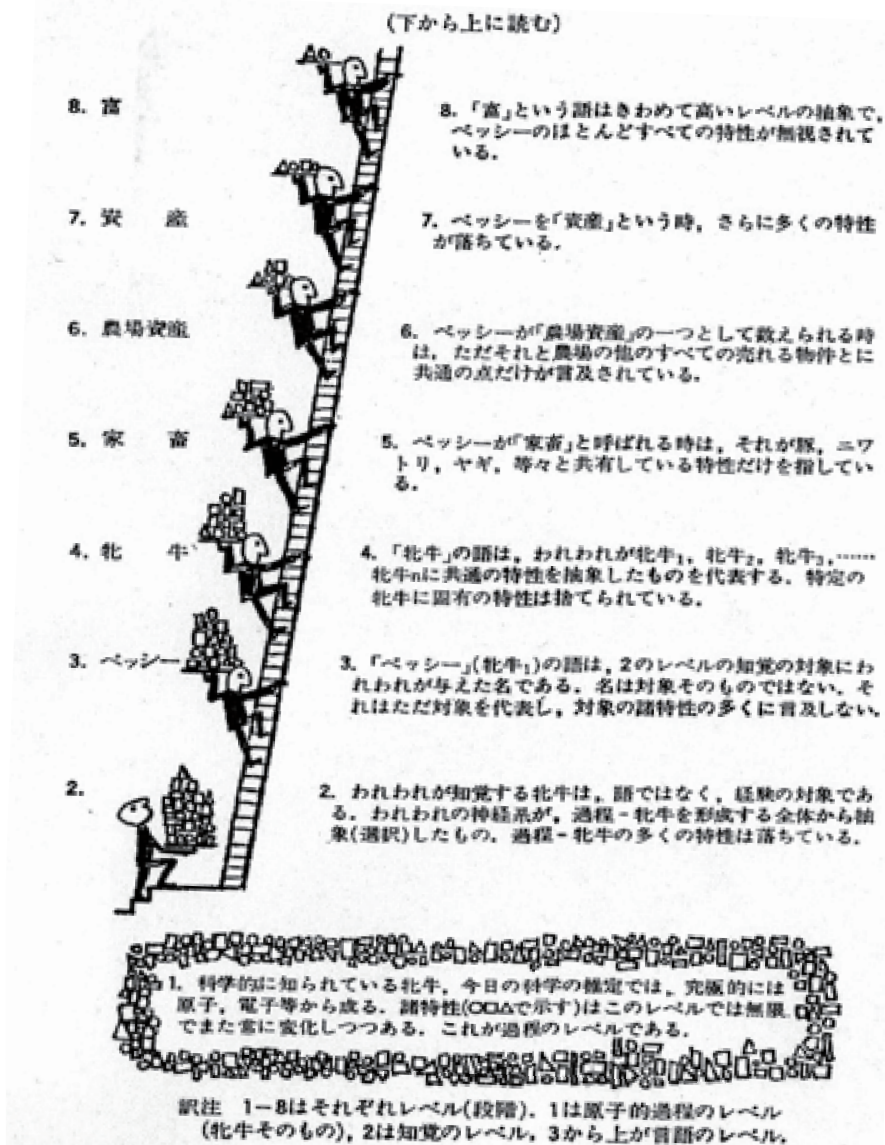
かような内容は、決して最近わかったことではなく、仏教の中で述べられている諸行無常と同一である。現実の世界は科学的にみれば、常に変化しており、変化していないものは存在していないことになる²⁷。

このことは、人間を認識するとき、過去の A と現在の A と将来の A をわれわれはよく同一の A として認識するが、一般意味論では、A も例外なく常に変化しているのであるから、過去の A と現在の A そして将来の A は異なることになる。

Hayakawa 教授は、次のように述べている。「…われわれの前に、牝牛の『ベッシー』がいるということにしよう。ベッシーは生きものであり、絶えず変化している、絶えず食物や空気を取り入れ、それを変形させ、それをふたたび排出している。その血は循環し、神経は通信を送っている。微視的に観察すれば、ベッシーは諸種の血球と細胞と細菌組織のカタマリである。現代物理学の見地から観察すれば、電子の不断の舞踊である。ベッシーを総体として知することは決してできない。たとえある瞬間のベッシーがこうであったと言えたとしても、次の瞬間には変化しているので、われわれの叙述はもう正確ではなくなっている。…しかしそれでもなお抽象である、というのは、それは現実のベッシーである過程の諸特性を落としているから。『ベッシー』（牝牛 1）という語は最低の言語的レベルの抽象である、それはさらに諸特性を落としている—昨日のベッシーと今日のベッシー、今日のベッシーと明日のベッシーとの差異を—そしてただ類似点だけを選んでいる²⁸」。

図3は、抽象のハシゴを表わしている。一般意味論では、抽象化が進むにつれて、多くの諸特性が失われていくことになると考えられる。

図3 抽象のハシゴ



出所: Hayakawa (1978, p.155)

一般意味論の抽象のハシゴを日本で初めて簿記・会計学の研究に導入したのは、船本修三教授である。そこで、次に船本教授の抽象のハシゴを紹介しよう。船本教授は、一般意味論の抽象のハシゴを図4によって明らかにしている。それでは船本教授の勘定の集約過程を示すことにしよう。

船本教授によると、勘定は、これを集約のための機構とみることができる。そこで、具体例として

1,000 円紙幣をとりあげ、これが抽象のハシゴにおいてどのように集約されていくものか、その過程をみることによって、勘定の集約過程の特徴が明らかになる。抽象のハシゴに基づいて 1,000 円紙幣の集約過程を図式化したものが図4である。

図4は、1「過程の1,000紙幣」から8「貸借対照表勘定」までの8段階のレベルを示すもので、1は原始的過程レベル、2は知覚のレベル、そして3か

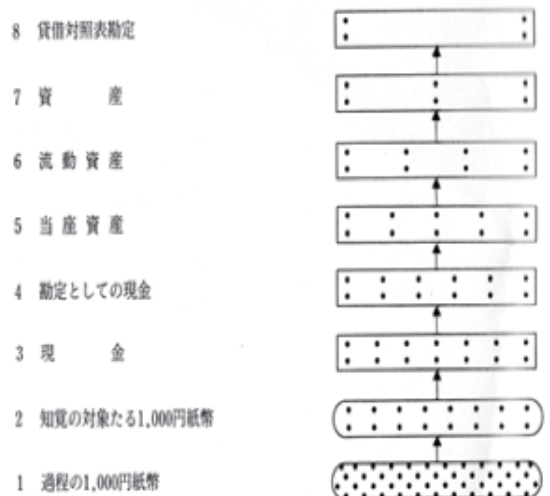
ら上が言語のレベルである。

まず「過程の 1,000 円紙幣」は、究極的には原子・電子等からなり、その諸特性は無限で常に変化している。このレベルは、これをわれわれの肉眼で観察することができない。つぎに「知覚の対象たる 1,000 円紙幣」は、経験の対象であって、われわれの神経系が「過程の 1,000 円紙幣」を形成する対象物全体から抽象したものである。これは、われわれの肉眼で観察した結果であって、最初のしかも最低レベルの抽象である。したがって「過程の 1,000 円紙幣」の諸特性の多くのものが捨象されている。さらに「現金」という語は、「知覚の対象たる 1,000 円紙幣」に対してわれわれが与えた名であって、対象物そのものではない。これは、最低の言語的レベルの抽象であって、さらに多くの諸特性が捨象されている。1,000 円紙幣と 5,000 円紙幣および 10,000 円紙幣との差異は無視されており、さらに、1,000 円紙幣と 500 円、100 円、50 円等の硬貨との差異も無視されている。ただ、これらの通貨としての類似点だけに注目しているにすぎない。「勘定としての現金」という語は、1,000 円紙幣などのような現金項目が、他人振り出しの小切手、送金小切手、郵便為替証書、および公債・社債の満期利札等の通貨代表証券と共通に持つ特性だけを抽象したものであり、1,000 円紙幣としての固有の特性は捨象されている。「当座資産」という語は、1,000 円紙幣などのように現金勘定に属する項目が受取手形や売掛金や一時所有の有価証券等と共通にもつ特性だけを抽象したものである。したがって、1,000 円紙幣の諸特性のうちのさらに多くのものが捨象されている。「流動資産」という語は、単に当座資産だけでなく、営業循環過程内にある資産、および営業循環過程内になくとも、決算日の翌日から起算して 1 年以内に現金化する資産も指示するものである。したがって、当座資産とこれ以外の資産、たとえば商品・製品・原材料・仕掛品・短期貸付金等が「流動資産」の名のもとに、すべて同一の性質をもつものとみなされることになる。「資産」という語は、流動資産・固定資産・繰延資産の三つのグループを指示するものであり、さらに抽象度が高くなる。最後に、「貸

借対照表勘定」という語は、資産・負債・資本の貸借対照表の要素のすべてを指示するものであり、きわめて高いレベルの抽象で、1,000 円紙幣のほとんどすべての特性が抽象されている。このように、集約過程において、抽象過程と同じ様に、集約度が高くなればなるほど対象の諸特性がより多く抽象され、反対に外延的にはより広範な対象を指示するのである。この点については図 4 の抽象のハシゴを下から上へ上がるにつれて、点の数が減少すること、そして表示した名称の概括度が高くなることをみれば容易に理解できるであろう。これと同じことは、損益計算書勘定たる費用・収益・損失・利益についてもいうことができる²⁹。

純利益を理念型で表わすならば、実現利益と表わすことができるだろう（井上教授が述べている単一測定属性会計がこれに当たると考えられる）³⁰。また、包括利益の場合には、純利益をこのように見たならば、実現利益と未実現損益の混合形態の利益で示すことができるだろう。現実の純利益が純粋に実現利益であるかどうかは別として、純利益と包括利益とは、理念的には抽象化のプロセスで表わすことができる Hayakawa 教授の抽象のハシゴの考え方を実証会計学に応用した拙著は、営業利益から経常利益、経常利益から純利益、そして純利益から包括利益へと会計利益の概念が抽象化されていくプロセスを明

図 4 勘定の集約過程



出所：船本（1991,p.99）

らかにしている³¹。

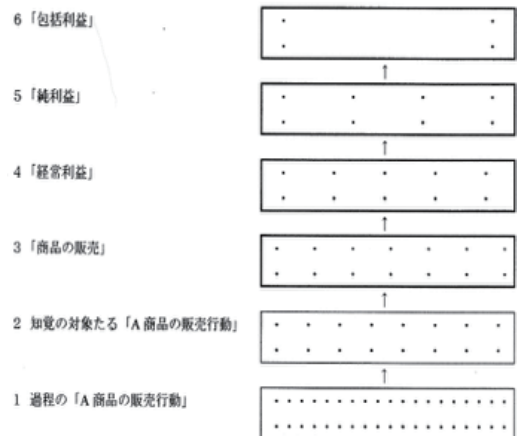
この場合、純利益から包括利益への抽象化のプロセスは、実現利益として具体化されていた純利益が、実現と未実現の混合としての包括利益に抽象化されていくことを示している。この抽象化のプロセスの中で情報内容が失われ、その結果、上位の利益（例えば包括利益）よりも下位の利益（例えば純利益）の方がより多くの情報内容を有することを明らかにしている。次の図5は、商品の販売における抽象のハシゴを表わしている。

図5の1の原始的過程の「A商品の販売行動」の諸特性の多くのものが捨象されていることになる。次に3の言語レベルの「商品の販売」という語は、2の知覚の対象たる「A商品の販売行動」に対して与えられた名称であり、行動そのものではない。ここでも多くの諸特性が捨象されており、A商品なのか、B商品なのか、またはC商品なのかの差異が無視されており、ただ共通する商品の販売によって収益が生じたという共通の特性に注目し、抽象化がなされているのである。また4のレベルの「経常利益」は、日常性または反復性を伴ったもので、営業損益と営業外収益と営業外費用から構成されている。ここでは日常性という共通の特性をもとに1つのグループに括られており、当然のことであるが、営業損益独自の特性は失われることになる。そして次に、5のレベル「純利益」では、純利益が経常利益に特別利益と特別損失を考慮して算出されるのであるが、経常利益の共通の特性である日常性という特性が失われ、実現という認識基準という共通のもとに1つのグループとして分類計算された利益である。

6のレベルの「包括利益」は、実現・未実現に関わらず、利益という共通の特性をもとに純利益とその他の包括利益の差異を無視し、純利益の独自の特性（実現利益）を捨象して1つのグループとして括られ計算された利益である。

かように、一般意味論を前提に会計利益の認識のプロセスを抽象のハシゴで明らかにしてきた。かような抽象のハシゴから明らかなように会計利益はかなり抽象度が高く具体的な特性が少ない。したがって、操作的定義でその内容をより明らかにすること

図5 純利益から包括利益への抽象のハシゴ



で、コミュニケーションにおける共通の理解が得られることになる。

4. 内在的思考の問題と操作的定義

定義は、研究や教育には必要不可欠である。会計利益もその定義が不明確であれば、共通理解は得られないであろう。次の定義は、藤澤教授によって提示されたものである³²。

(1) 同義語による定義

ポケット辞書などは同義語による定義で溢れている。同義語で言い換えると何となくわかったような気がする。しかしながら、同義語との差異が示されないならば、その言葉を正確に使えるようにならない。例えば、「冷ます」の説明に「冷やす」と書いてあった場合、どちらも温度を下げる表現には違いないが両者の意味は同じではない。その例として、「冷めたコーヒー」と「冷えたコーヒー」は別物であることがわかる。また、同義語による定義には、循環定義に悩まされる恐れがある。例えば、「拒む」という語の意味がわからなくて辞書を引くと、「拒絶する」とあり、「拒絶する」を辞書で引いた場合に、「拒む」と出ていたならば、同義語の意味を知らない者は、理解できなくなる。

(2) 分類による定義

分類による定義は、社会科の教科書などによく登場する定義である。知識体系の中での位置づけはわかりやすいが、具体的なイメージがつかめないのが

この定義の欠点である。生物学の分類で「人間」は、「動物界、脊索動物門、脊椎動物亜門、哺乳綱、サル目、真猿亜目、ヒト上科、ヒト科、ヒト属、ヒト」と定義されが、分類の全体構造が理解できていない者には、何を意味しているのかわからない定義になる。

(3) 列挙による定義

列挙による定義は、その分類に含まれる要素を、一つずつ列挙していく定義である。「首都圏」ならば、「東京都、埼玉県、千葉県、神奈川県、茨城県、栃木県、群馬県、山梨県」と、列挙して定義できる。また、英語で「冠詞」とは、「a と the のこと」と定義できる。この列挙による定義であるが、要素が少ない場合にはすべて漏れなく列挙することが可能でも、要素が多い場合には代表しか示せないのが欠点である。この場合、聞き手が条件を誤解して誤概念が形成される恐れがある。例えば、「固有名詞」とは、「山田太郎、佐藤花子、日本、フランス・・・(中略)・・・のような言葉である」という列挙しかない場合、「固有名詞」とは「世界に唯一のものの名前である」と誤解する者が出てくる。「地球」は一つしかないけれども、固有名詞ではないので、この解釈は誤りということになる。

(4) 外在的世界の事物を例示する定義

外在的世界の事物を例示する定義とは、言葉の指示対象を実際に見せることによって定義することである。実物があるならば、一番確実であるが、写真や映像、絵で示すことも可能である。とてもわかりやすいのが良いところであるが、問題なのは、どの語でも例示によって定義できるわけではない点である。例えば、「幸福」のような抽象的な語はこの定義では表わせない。また「仕事」も、特定の仕事をみせることができて、「仕事そのもの」を見せることはできない。定義可能な内容が一部に限られることが、この定義の特徴である。

(5) 操作的定義

操作的定義とは、物理学や料理の本などでよく採用されている定義である。この定義は、どのようにすれば外在的に体験できるかの方法を示すやり方である。例えば、「オムレツ」とは、「溶きほぐした卵を塩・胡椒で調味し、肉・野菜などの材料を卵に混

ぜ込んだり、卵に包み込んだり、または何も加えない状態で紡錘形に焼いた料理」と説明できる。このように定義すると、誰でも「オムレツ」を作ることができるので正確に伝わることになる。かような操作的定義は、会計利益を定義するさいに、共通の理解を得るために有効であると考えられる。図2で明らかにしたように、われわれは、内在的世界と外在的世界を有しており、内在的考え方では、外在的世界から知覚した内容を歪曲する傾向にある。かような歪曲から操作的定義は共通理解へと導いてくれるのである。

おわりに

会計利益といった場合、あまりに抽象的なものであることから、その意味内容を正確に把握することは難しい。それは抽象のハシゴで見えてきたように、あまりに抽象化して把握される会計利益には、ほとんど具体的な特性がみられないからかもしれない。そこで、本稿で考察してきた操作的定義がより有効になる。例えば、売買目的有価証券を取得原価で評価していた時代の当期純利益といったように、より操作的に定義をおこなえば、会計的知識のある誰もが同じ当期純利益を想定することが可能になるであろう。本稿は、時の経過とともに変化していく会計利益を明らかにすると共に、どの時点のどの内容の会計利益であるかについて、操作的定義をおこなうことで、共通理解が得られることを明らかにしてきた。今後において、かような操作的定義を会計研究の実験や実証研究に役立てられれば幸甚である。

注

¹ Bedford (1965,p.67)。

² Bedford (1965,p.67)。

³ 米国では 1997 年に、日本では 2011 年から包括利益を開示している。なお、日本では現在まで連結財務諸表でのみ包括利益を開示している。

⁴ 「会計の見地からすれば、操作主義は利益概念に関連させて説明されるであろう。利益とは欲求を満たすわれわれの能力の変化であると述べるならば、

われわれは利益に対して言葉による定義をおこなったことになる。もし、利益を測定するさいに、利益から資本利得や資本損失を除くことに決めるならば、資本利得や資本損失を利益に含めた場合に得られるであろう概念とは異なる利益の概念をわれわれはもつのである。利益がどのように測定されるかを知ることによってのみ、その正確な定義を得ることができる。多くの異なった方法が利益の測定に適用できるので、利益を測定する操作を知ることによってのみ、報告された利益の正確な意味を理解することができる。」Bedford (1965,p.89)

⁵ Bedford (1965,p.67)。

⁶ 日本において、1999 年に、「金融商品に係る会計基準の設定に関する意見書」、「金融商品に係る会計基準」、そして「金融商品に係る会計基準注解」が、当時の大蔵省企業会計審議会によって設定され、売買目的有価証券に時価基準が採られるようになった。

⁷ 井上良二教授は、かような日本の会計を第一類型として分類している。

⁸ Bedford (1965,pp.67-68)。

⁹ たとえば、2002 (平成 14) 年の「固定資産の減損に係る会計基準」、2003 (平成 15) 年の企業会計基準適用指針第 6 号「固定資産の減損に係る会計基準の適用指針」そして、2004 (平成 16) 年の実務対応報告第 14 号「固定資産の減損に係る会計基準の早期適用に関する実務上の取扱い」などがある。

¹⁰ Bedford (1965,p.68)。

¹¹ 継続性の原則とは、企業会計上、1 つの会計事実に対して複数の代替的な会計処理方法や表示の方法等が存在する場合に、企業がいったん選択適用した方法を每期継続して適用し、正当な理由がある場合を除き変更してはならないことを要請する原則である。継続性の原則が必要とされる理由として、財務諸表の期間比較性の確保と経営者による利益操作の排除の 2 つがあげられる。

¹² 従来は、この他に後入先出法も選択することができた。しかしながら・・・、どの会計処理方法を選択したかを明らかにしなければならない。

¹³ Bedford (1965,p.68)。

¹⁴ 分配可能利益と考えることもできる。

¹⁵ 拙稿 (2017)。

¹⁶ この内在的意味は、基本的には、その語を聞いた(知った)時に、当事者が頭の中に想起される内容である。したがって、たとえば「犬」という語に対して、「人間に最も忠実な動物」を想起する者もいれば、「スパイ」と捉える人もいるだろう。また、生物学の分類ならば、「食肉目、イヌ科の哺乳類の動物」とすることが適切のように思われる。このように、内在的意味では、当事者に様々な意味が想定される可能性があるのである。藤澤 (2011, pp.59-60)。

¹⁷ Bedford (1965,p.68)。

¹⁸ 拙稿 (2019)。

¹⁹ Bedford (1965,p.69)。

²⁰ 藤澤 (2011)。

²¹ 藤澤 (2011, pp.184-189)。

²² そしてかような問題が生じると、次のようなパターンに陥りやすいのである。

(イ) 事実を例外とみなして信念を変えない (ロ) 事実を否定して信念を変えない (ハ) 全否定する。

²³ 藤澤 (2011, pp.189-191)。

²⁴ 藤澤 (2011, pp.189-191)。

²⁵ 藤澤 (2011, p.127)。

²⁶ Hayakawa(1978, p.153)。

²⁷ アルボムツレ・スマナサーラ (2017)。

²⁸ Hayakawa(1978, p.154)。

²⁹ 船本 (1991,pp.98-100)。

³⁰ 井上 (2006,p.814)。

³¹ 拙著 (2008) を参照されたい。

³² 藤澤 (2011, pp.106-108)。Rapoport (1953)。

引用・参考文献

(外国文献)

Bedford,Norton M.,*Income Determination Theory: An Accountiong Framework.*, Addison-Wesley Educational Publishers Inc .,1965.

Hayakawa.S.L.,*Language in Thought and Action, FourthEdition*,Jovanovich,Inc,1978.

Korzybski,Alfred, *Science and Sanity:An Introduction to Non-Aristotelian Systems and*

General Semantics. Lancaster, Pa.: Science Press
Printing Company, 1933.

Rapoport, Anatol, *Operational Philosophy*, New York:
Harper, 1953.

(日本文献)

アルボムッレ・スマナサーラ『ためない生き方 ネ
ガティブな心を上手に消す智慧』SB クリエイティ
ブ, 2017 年。

井上良二編『財務会計論』税務経理協会, 2014 年。

孔 炳龍「一般意味論からみる純利益と実現利益 -
市場効率性と実現利益の変遷 -」『駿河台経済論
集』第 27 巻, 第 1 号, 2017, pp.1-24。

孔 炳龍「取得原価主義会計と時価会計 取得原価
を考える」『駿河台経済論集』2019 年, 第 28 巻,
第 2 号, pp.31-48。

藤澤伸介『言語力 認知と意味の心理学』新曜社,
2011 年。

船本修三『簿記基礎論 会計・情報・コミュニケー
ション』法政出版, 1991 年。

<会計基準等>

企業会計審議会「金融商品に係る会計基準の設定に
関する意見書」

企業会計審議会「金融商品に係る会計基準」

企業会計審議会「金融商品に係る会計基準注解」

企業会計審議会「固定資産の減損に係る会計基準」

企業会計基準委員会「固定資産の減損に係る会計基
準の適用指針」(企業会計基準適用指針第 6 号)

企業会計基準委員会「固定資産の減損に係る会計基
準の早期適用に関する実務上の取扱い」(実務対
応報告第 14 号)

企業会計基準委員会「包括利益の表示に関する会計
基準」(企業会計基準第 25 号)